



県土躍進という夢の実現に取り組んだ 民間出身知事

よしだ みのる
吉田 実 (1910~1982)

明治43年（1910）3月19日、射水郡大島村（現射水市大島）に、父元吉の長男として生まれた。

昭和31年（1956）、富山県知事に立候補した。県政界を二分するまれに見る激しい戦いであった。大島村長で農協連合会役員として農政に優れた見識をもつ吉田は初の民間出身知事として、4万7千票の大差を付けて初当選を果たした。以後、4期連続で当選し、昭和44年までの13年間、県政をリードした。

まず、高辻武邦 前知事時代の「富山県総合開発計画」を引き継ぎ、戦後の計画県政の基礎を固めた。この計画は、荒れた県土を復旧し、水資源の開発を軸に農業・工業の開発・発展を図り、県民生活の向上をめざすもので、全国に先駆けて策定された大計であった。

昭和34年（1959）、吉田の著書『野に山に海に』がベストセラーになった。それは、吉田が時代の先を見据え、引き継いだ計画に修正を加え、県政の基本方針（夢）として世に問うたものであった。「野」の夢とは、農業技術の向上、大規模圃場整備の促進、機械化による省力、有畜農業などを中心にしたものである。「山」の夢とは、立山黒部の開発と観光の大衆化であり、いわゆるアルペンルートの開通である。昭和35年 立山黒部有峰開発株式会社の設立、同38年 黒四ダム完成、同44年 立山トンネルの貫通、同46年 アルペンルート全線開通と進んだ。「海」の夢とは、富山新港の開港である。新産業都市の要としての富山新港の港湾整備と射水地区の乾田化を一挙に成し遂げるといふ吉田の強い思いのもと、昭和36年9月に着工、同43年4月に開港へと進んだ。新港背後地には工業地帯を造成し、また、これらの住宅地として太閤山ニュータウンを造成した。これら大事業には幾多の困難を伴ったが、着実に成し遂げた実行力には目を見張るものがあった。

また、昭和33年（1958）に開催された富山国体では、全国初の試みだった民泊が好評で、県民挙げての国体協賛の気運が高まるとともに、親切な富山県民のイメージを全国に広めた。この時選定された「富山県民の歌」もまた、県民の団結と意識高揚に効果があった。

この他にも、町村合併の推進、県立大谷技術短期大学（現富山県立大学工学部）の創設を始めとする教育の振興、道路舗装・除雪の促進や富山空港の開港など交通網の整備等、多くの政策に取り組んだ。

昭和44年（1969）、松村謙三、正力松太郎の引退表明を受けて国政に転身、知事を辞して衆議院選挙に出馬しトップ当選を果たす。同49年、参議院選挙に圧勝して国政に復帰、同55年に再選した。得意の農政の他、文化財保護、エネルギー対策等、様々な分野で活躍したが、体調を崩し、昭和57年（1982）、11月16日、逝去。県土躍進という夢の実現に取り組んだ生涯であった。享年72歳。

<専門員 眞田 武志>



吉田の著書「野に山に海に」



新港整備計画概要図(左著書より)



新湊地区航空写真(令和3年12月14日撮影)
(国土交通省北陸地方整備局提供)